重野安繹と中井木菟麻呂 ―『黄裳斎日記』を中心に―

竹田健二

はじめに

明治二年（一八六九）に懐徳堂が閉鎖された後、本庄村（現在の大阪市北区）に移り住んだ懐徳堂最後の預人・中井桐園が明治十四年（一八八一）に没すると、桐園の子・中井木菟麻呂が中井家の当主となった。木菟麻呂は懐徳堂に住んでいた時から、懐徳堂最後の教授である外祖父の並河寒泉や桐園に漢学を学んでいたが、明治十一年（一八七八）に正教に入信し、その後日本における正教布教の中心人物であるニコライ主教（後に大主教）に見出されて、明治十五年（一八八二）に家族を伴い上京した。近代化が進む中、懐徳堂の学舎は失われ(注1)、歴代学主を務めた中井家も大阪を離れてしまったことから、江戸時代に大坂の教学を百四十年余り担った大坂学問所・懐徳堂の存在は、明治も後半に入ると、大阪の人々の記憶から次第に消えていったものと推測される。

ところが、周知の通り明治四十年代に入ると、西村時彦らを中心に大阪人文会・懐徳堂記念会による懐徳堂顕彰運動が勃興し、大きく展開した。これより前、明治二十六年（一八九三）に木菟麻呂が懐徳堂・水哉館の再興を計画したが、失敗に終わっている(注2)。懐徳堂の閉鎖から顕彰運動が勃興するまでの間、この木菟麻呂の計画の他に、特に懐徳堂を高く評価する動きはほとんど知られていない。このため、明治末の懐徳堂顕彰運動の勃興は、あたかも俄に湧き上がったものであるかのように見受けられる(注3)。

しかし、私見では、懐徳堂顕彰運動の勃興前に存在

した懐徳堂を評価する動きとして、明治三十年代に重野安繹（やすつぐ）（号は成斎）と幸田成友とがそれぞれ木菟麻呂と接触していることに注目すべきである。幸田については、既に前稿で述べたように、『大阪市史』編纂に際して懐徳堂に注目した幸田が、その資料を求めて明治三十五年（一九〇二）以降重ねて木菟麻呂と接触し、その結果中井家所蔵資料の写本が大阪にもたらされた。そしてそれらは、大阪人文会会員の大田源之助を介して西村時彦に伝えられて、西村の『懐徳堂考』上巻執筆に活用された（注4）。

重野は鹿児島の出身で、藩校の造士館と江戸の昌平黌で学び、東京帝国大学教授、また日本で初めての文学博士となった人物である。明治四十一年（一九〇八）六月二十三日、中井家の祖先である甃庵・竹山・蕉園の三人を祭る祭典を大阪で挙行することを企画した木菟麻呂が、重野の自宅を訪問して協力を求めた際、重野は賛同して、大阪朝日新聞に勤める西村を紹介した。その二ヶ月後の同年八月、木菟麻呂が大阪において西村と面談したことが、その後の懐徳堂顕彰運動の勃興、すなわち明治四十三年（一九一〇）一月の大阪人文会における西村の講演等に結び付く起点となったことはよく知られている。木菟麻呂が「追懐遺事三篇」（『懐徳』第二号〔懐徳堂同友会、一九二五年〕所収）において、明治四十一年（一九〇八）の重野との面談に触れているのも、この時の重野との面談が懐徳堂顕彰運動勃興において重要であったとの認識があったためであろう。

しかし、実は重野と木菟麻呂とは、それ以前にも接触している。すなわち、明治三十年（一八九七）三月、重野は木菟麻呂を訪問し、中井家所蔵の懐徳堂関係資料を実見しているのである。管見の限り、この時の両者の接触について注目した先行研究はないが、懐徳堂文庫・新田文庫資料の一つである木菟麻呂の日記『黄裳斎日記』には、二人の最初の接触についての記述がある（注5）。

そこで小論では、懐徳堂顕彰運動は如何にして勃興したのかとの問題意識から、『黄裳斎日記』の記述を中心として、明治三十年（一八九七）における重野と木菟麻呂との最初の接触について検討を加える。

一　『黄裳斎日記』の記述

明治三十年（一八九七）に重野が木菟麻呂を訪問したことについて、三月二十七日付の木菟麻呂の日記『黄裳斎日記』に、以下の通り記述されている。

往来　廿七日土雨（中略）〇午后重野氏他四名并佐藤司祭ハ預約ノ如ク来ラレタリ頃クシテ二人来レリ（中略）
雑事　本日午后先哲ノ圖書ヲ見ンガ為ニ来リシハ

重野安繹日下寛植松彰河田羆寺田弘三浦十郎及姓名ヲ聞キ漏ラシシ人一名并セテ七名ナリ共ニ重野氏ノ率ヒ来リシ人々ナリ河田氏ハ一斎先生ノ外孫ナル由嘗テ中井敬所翁ノ家ニ於テ相見タルコトアリ及佐藤司祭ナリ観覧ニ供セシ者ハ遺著類法帖類掛軸類草稿マクリノ類ナリ重野氏ハ幽人先生ノ猿島復讐圖幅ヲ携ヘ来ラレタリ是丹波ノ人某ガ大坂ニ於テ購ヒシ所ニシテ圖畫并ニ賛頗ル家藏ノ幅ニ類セリ圖中ニ賛ヲ問書セルコトニヨリテ考フレバ是嘗テ華翁先生ニ聞キシ所ノ懐徳書院ニ鑑定ヲ請ヒ来リシ者ナリ今ニシテ之ヲ見ルコトヲ得タルハ頗ル奇遇ノ感アリ函盍ハ蕉園先生ノ手跡ナリ余之ヲ写サンコトヲ請ヒタレバ重野氏ハ之ヲ置キテ帰ラレタリ席上寺田氏ノ語ル所ニヨレバ戰國策ノ雕題本ハ今近藤元粹氏ノ藏スル所トナリ離騒ノ雕題本ハ京都ノ秦某氏之ヲ藏セリト云フ余之ヲ聞キテ殊ニ楚辞ノ雕題本ヲ得ンコトヲ希望セリ秦氏ハ既ニ没シテ今遺屬ノ手ニ帰セシナルベシト云フ六時前帰ラレタリ

（明治三十年三月二十七日付）

この日重野は、懐徳堂の「先哲ノ圖書ヲ見ンガ為ニ」、日下寛・植松彰・河田羆・寺田弘・三浦十郎、及び氏名不詳の一名と共に、木菟麻呂を訪問した。そこで木菟麻呂は、彼らと正教会の佐藤司祭とに対して、中井家の所蔵する「遺著類法帖類掛軸類草稿マクリノ類」を「観覧ニ供」した。

この時重野が、どのような意図で懐徳堂の「先哲ノ圖書ヲ見」ようとしたのかについては、木菟麻呂は何も触れていない。しかし、この時重野が「幽人先生ノ猿島復讐圖幅ヲ携ヘ来」たこと（注6）、また重野に同行した寺田弘が中井履軒の著した雕題類に関する情報について「戰國策ノ雕題本ハ今近藤元粹氏ノ藏スル所トナリ離騒ノ雕題本ハ京都ノ秦某氏之ヲ藏セリ」と語っていることからすると、重野らは特に履軒について興味を持っていたように見受けられる。おそらく重野は、履軒関係資料の実見を主な目的として木菟麻呂を訪問した可能性が高いと推測される。

なお、この時の重野の訪問には、当初木村香雨・熊谷謙吉の二人も同行する予定であった。このことは、五日後の四月一日付『黄裳斎日記』の記述から確認できる。

往来　一日木雨〇（中略）午后四時過ヨリ木村香雨氏熊谷謙吉相携ヘテ来レリ（中略）
雑事　本日熊谷氏等ノ来ラレシハ去ル廿七日重野氏等ト共ニ来ルコトヲ得ザリシニヨリテ余ガ佐藤司祭ヲ以テ之ヲ招キシニヨルナリ木村氏ハ先ヅ竹山先生ノ遺印ヲ見ンコトヲ請ヒテ其大印十餘顆ヲ押シ他ハ後日ヲ約シテ帰ラレタリ熊谷氏ハ殊ニ萬

年先生ノ紫煙帖及緩歩帖襄陽帖ヲ開キテ感嘆措カザリキ萬年先生ノ名古来洽ク傳ラズ其書亦甚ダ稀ナリ此ヲ以テ是等ノ遺墨ヲ見ル者ハ何人モ拍手驚嘆セザルコトナシ余此ニ於テ之ヲ公ニシテ萬年先生ノ名ヲ百餘年ノ後ニ播揚センコトヲ切望セリ幸ニ紫煙帖ノ木版ハ大和淡輪氏ニ預キヲキタレバ時ヲ得テ之ヲ取リ世ニ公ニスルコトアルベシ

（明治三十年四月一日付）

重野が訪問した五日後、四月一日に木菟麻呂を訪問した木村は、竹山の印を実見して「大印十餘顆ヲ押シ他ハ後日ヲ約シテ帰」り、また熊谷は三宅石庵の『紫煙帖』・『緩歩帖』・『襄陽帖』を実見した[注7]。資料の実見に訪れた者たちの関心は、それぞれに異なっていたことが窺える[注8]。

この『黄裳斎日記』の記述において注目される点は、木菟麻呂が石庵の遺墨について、石庵の名は世に知られていないが、その遺墨を実見した人は、熊谷がそうであったように「何人モ拍手驚嘆セザルコトナシ」と非常に高く評価する、そこで「余此ニ於テ之ヲ公ニシテ萬年先生ノ名ヲ百餘年ノ後ニ播揚センコトヲ切望」する、と述べている点である。この記述は、木菟麻呂が中井家のみの再興を願っていた訳ではなく、石庵らを含む懐徳堂全体に対する社会的評価の向上を強く望んでいたことを示すと考えられる。

ここで留意しておかなければならないのは、木菟麻呂が懐徳堂関係の遺書類を所蔵していることを、重野らがどうやって知ったのか、という点である。このことについて、『黄裳斎日記』には特に記述がなく、重野らが中井家の所蔵する懐徳堂関係資料の存在を知った経緯等は不明である。

私見では、木菟麻呂が明治二十五年（一八九二）十一月に博文館から中井履軒の『百首贅贅』を出版した際、その巻末に付した「懐徳堂遺編目録」と「水哉館遺編目録」とが、中井家所蔵資料の存在を重野らが知る手がかりとなった可能性がある。「懐徳堂遺編目録」は懐徳堂で活躍した三宅石庵・五井蘭洲・中井竹山・中井蕉園・中井碩果の遺著について、また「水哉館遺編目録」は中井履軒の遺著について、いずれも木菟麻呂がまとめたものである。両目録は、明治二十年代半ば以降において、木菟麻呂以外の人が懐徳堂や水哉館に関係する資料について知る上で、極めて貴重な情報源であったと考えられる。このことは、西村時彦が明治四十三年（一九一〇）二月七日から同月二十七日にかけて、大阪朝日新聞に連載した「懐徳堂研究其一」（最終回に「懐徳堂考上巻」と改題）の中で、「石菴の學問著述」・「甃庵の學術性行」・「蘭洲の著書」の箇所で「懐徳堂遺編目録」に言及していることからも首肯されよう[注9]。

もっとも、前述の通り四月一日に木村は竹山の印を、熊谷は石庵の『紫煙帖』・『緩歩帖』・『襄陽帖』を木菟麻呂の自宅で実見したが、そもそも書籍ではない竹山の印について「懐徳堂遺編目録」には記載が無く、また石庵の『紫煙帖』・『緩歩帖』・『襄陽帖』も記載されていない。このため、重野らには「懐徳堂遺編目録」・「水哉館遺編目録」以外にも中井家所蔵資料に関する情報源が別にあったと考えられる[注10]。

二　重野に対する木菟麻呂の期待

前章で述べたように、三月二十七日の訪問の際、重野は履軒の「猿島復讐圖幅」を持参しており、木菟麻呂がその図の臨写を希望すると、重野は「之ヲ置キテ帰」った。木菟麻呂は四月四日に臨写を終えると、翌五日、図を重野に返却しているのだが、木菟麻呂は『黄裳斎日記』に、そのことについて以下のように記している。

往来　四日日晴〇（中略）
雑事　廿七日重野氏ガ携ヘラレタル解子伐袁一幅其後雙鉤臨寫シテ本日其業ヲ卒ヘタリ共ニ二部ヲ寫セリ其一ハ重野氏ニ呈センガ為ニ之ヲ作レリ

（明治三十年四月四日付）

往来　五日月晴〇（中略）午后大越氏ニ如キ後重野氏ニ如ク（中略）
雑事　午后重野氏ニ如キテ解子伐袁幅ヲ返璧セリ重野氏ハ前日ノ遺書展觀ノ事ヲ謝シテ遺稿上梓ノコトヲ勸メラレタリ余ハ是多年ノ希望ナル趣ヲ述ベテ共ニ謀ルベキ書肆ナキ事ヲ告ゲタルニ氏ハ之ヲ紹介スベキ事ヲ約セラレタリ遺書上梓ノ事或ハ之ニヨリテ緒ヲ開クヲ得ンカ又萬年先生ノ事ヨリ其門人ニシテ懐徳書院建立ニ力ヲ尽セシ天王寺屋吉右衛門ノ事ニ及ビ氏ハ其著ナル出定後語ヲ示サレタリ冨（マヽ）永仲基ハ則天王寺屋ノ事ナリ其年代ヲ考フルニ懐徳書院創立ノ後二十年ニアリ其頃仲基ハ佛門ニ帰シテ萬年先生ノ怒ヲ被リタリト云フ此書漢文ヲ以テ佛教ノ事ヲ論ジタリ余始メテ其學識ニ富メル事ヲ知レリ

（明治三十年四月五日付）

ここで先ず注目される点は、重野が木菟麻呂に対して、中井家所蔵の懐徳堂関係遺書の出版を進めた点である。すなわち、木菟麻呂が「猿島復讐圖幅」を重野に返却すると、重野は三月の遺書の実見について礼を述べるとともに、その出版を木菟麻呂に勧めた。これに対して木菟麻呂が、遺書の出版は自らの「多年ノ希望」であるが、自分にはその出版について「共ニ謀ルベキ書肆」がないと答えると、重野は「之ヲ紹介スベキ事ヲ約セラレ」た、というのである。この重野の約束について木菟麻呂は、「遺書上梓ノ事或ハ之ニヨリ

テ緒ヲ開クヲ得ンカ」と記しており、重野の言葉に非常に大きな期待を寄せたことが窺える。

また、木菟麻呂が「猿島復讐圖幅」を重野に返却する際に、臨写した一部を重野に寄贈している点も注目される。そもそも三月に重野が訪問した時に、木菟麻呂が「猿島復讐圖幅」を借り受けたのは、この図とその賛とが「頗ル家藏ノ幅ニ類」し、また「函盍ハ蕉園先生ノ手跡」であり、「嘗テ華翁先生ニ聞キシ所ノ懐徳書院ニ鑑定ヲ請ヒ来リシ者」が持参したことがあるものと考えられたことから、「今ニシテ之ヲ見ルコトヲ得タルハ頗ル奇遇ノ感」があると、木菟麻呂自身が強い興味を抱いたことによる。従って、木菟麻呂が重野から借用して臨写し、その臨写した図を自ら所蔵しようとしたことは、至極自然であるように思われる。しかし、木菟麻呂は何故重野の図を二部臨写し、一部を重野に贈呈したのであろうか。『黄裳斎日記』の記述を見る限り、重野がそうすることを求めたためとは考え難く、臨写した一部を重野に寄贈することは、木菟麻呂の自発的な行為と考えられる。

あくまでも憶測に止まるが、木菟麻呂が臨写した図を重野に贈呈したのは、借用の申し入れに無償で応じてくれた重野に対して謝意を示すためであり、また同時に、そうすることによって重野との関係をより強固にするためだったのではないかと考えられる。

前述の通り、木菟麻呂は明治二十六年（一八九三）に懐徳堂・水哉館の再興を計画したが、計画に賛同して協力する有力者を得ることができずに失敗に終わった。経済力に乏しい木菟麻呂にとって、念願である懐徳堂・水哉館の再興を実現するには、有力者の協力を得ることが不可欠だったのである。木菟麻呂が重野の中井家所蔵資料の実見について、複数の同伴者を引き連れて来ることを含めて快く受け入れているのも、有力者との関係を築くきっかけとなることを期待したためと推測される。木菟麻呂が頼まれもしないのに「解子伐袁幅」を臨写して重野に寄贈したのも、或いはそもそも重野に「解子伐袁幅」の借用を申し出たのも、社会的地位を有する重野との関係を重視したためである可能性が高いように思われる。

なお、木菟麻呂が重野を訪問した際の『黄裳斎日記』の記述の中で、富永仲基の『出定後語』について、木菟麻呂が「余始メテ其學識ニ富メル事ヲ知レリ」と記している点は興味深い。仲基の存在自体は木菟麻呂も知っていたのであろうが、その学問や著書『出定後語』等に関しては詳しくは知らなかったのである。このことは、木菟麻呂の懐徳堂に関する理解や関心が、仲基ら懐徳堂の門人までには十分及んではいなかったことを示していると考えられる。

三　重野の寿宴

前章で述べたように、明治三十年（一八九七）四月五日に重野は木菟麻呂に、中井家所蔵の懐徳堂関係遺書を出版する出版社を「紹介スベキ事ヲ約」した。この約束を聞いた木菟麻呂は、「多年ノ希望」である遺書の出版、ひいては懐徳堂・水哉館の再興が実現に向けて動き出す可能性があると受け止め、大いに期待を高めるとともに、重野との関係を継続し、できれば一層強くする必要のあることを痛感したと推測される。

しかしながら、『黄裳斎日記』には、この後数ヶ月間両者の交流に関する記述がない。出版社の紹介に関して、重野からの具体的な連絡が届くことはなかったと考えられる。

年が改まって明治三十一年（一八九八）二月、木菟麻呂のもとへ、重野の古稀を祝う寿宴への招待が届いた。『黄裳斎日記』には、その招待について以下のように記されている。

雑事（中略）向島ヨリ帰リシ時一封書ノ机上ニアルヲ見タリ是三月廿七日ヲ以テ重野博士七■（一字不明）壽讌ヲ紅葉館ニ催ス擧アルニヨリ其発起人惣代三浦安小牧昌業、西徳次郎、墨川良年四氏ノ名ヲ以テ賛成ヲ求メ来リシナリ余モ甚ダ臨席センコトヲ欲シ且先ニ管野氏ノ壽讌ニ贈リタル如キ顔真卿壽字大幅ヲ贈ランコトヲ望メリ

（明治三十一年二月二十六日付）

明治三十一年（一八九八）二月二十六日、重野の古稀を祝う会への招待状を受け取った木菟麻呂は、「甚ダ臨席センコトヲ欲シ」、また「顔真卿壽字大幅ヲ贈」ること計画した。木菟麻呂は、重野との関係がより深まること、直接にはおそらく、出版社を紹介するとの前約を重野に思い起こさせ、その履行を促すことを意図し、重野の寿宴への参加と、記念の書の贈呈を決めたと推測される。

実はこの九日前の二月十八日、懐徳堂の復興を願う木菟麻呂を大いに落胆させる知らせがあった。山階宮晃親王の死去である(注11)。山階宮は明治元年（一八六八）の春、閉鎖の危機に瀕していた懐徳堂を突如訪問しており、明治十八年（一八八五）、木菟麻呂は山階宮の古稀の寿宴の際に、明治元年の懐徳堂訪問への感謝と共に懐徳堂再興の希望とを述べる書を山階宮に献上し、「拝謁を賜」わっている。この時山階宮は、「予は汝の志を嘉みす、若再興の計畫でもできたならば、何時でも申出でよ、一臂の力を假すといふほどの事はできないだらうけれども、應分の事はして遣す」と木菟麻呂に語ったという(注12)。懐徳堂復興の希望を支える存在であった山階宮の死去は、木菟麻呂に大きな打撃をもたらしたと考えられる。

そうしたところに舞い込んできた重野の寿宴への招待状が、木菟麻呂に山階宮の寿宴を想起させたかどう

かは分からない。しかし、懐徳堂の再興を実現する上での希望は今や重野との関係を措いて他には無く、また重野の寿宴への出席は、未だ具体的な進展を見ていない遺書の出版を実現させるための絶好の機会であると、木菟麻呂は意識したと推測される。『黄裳斎日記』には、木菟麻呂が重野に贈呈する「壽字大幅」等の作成に力を注いだことについて、以下のように記されている。

雑事（中略）重野博士ヲ壽スル文詩ヲ草セント欲スルニヨル

（明治三十一年三月十二日付）

雑事　重野氏壽宴ニ寄贈スベキ掛軸并壽章送呈ノ儀ニ付使ヲ重野氏ノ宅ニ遣シテ書ヲ植松氏ニ送リ以テ之ヲ照會セシニ植松氏復書ヲ与ヘテ之ニ答ヘタリ

（明治三十一年三月十九日付）

雑事　本日午後重野博士ニ呈スベキ擬大雅麟奕七章ヲ認ム既ニ二葉ヲ書シテ未ダ成ラザリシガ薄暮主教ヨリ便アリテ明朝ヨリ翻訳ノ業ニ就カンコトヲ報ジ来リシニヨリ今夜深更ニ及ビテモ認メ終ラント欲シタレドモ體倦ミタレバ其意ノ如クナル能ハザルヲ察シテ此夜ハ筆ヲ止メテ寝ニツケリ明一日ヲ以テ書シ終ラント預期セシニ今一両日ノ間ニ至リテ業務ヲ繼續スルニ至リシコト頗ル余ガ心ヲ痛刺セリ然レドモ之モ亦止ムヲ得ザルナリ

（明治三十一年三月二十四日付）

雑事　擬大雅ヲ書スルニハ本日午後ヲ除キテ他ニ其時日ヲ存セザルニヨリ全ク此半日ヲ費シテ二通ヲ書シ了リ其善キ者ヲ撰ビテ一ヲ我家ニ留ムルコトトナセリ初ハ時ノ足ラザルヲ憂ヒタリト雖幸ニ之ヲ認メ終リシハ喜ブベシ

（明治三十一年三月二十五日付）

雑事　昨日認メタル擬大雅ヲ今朝表具師ニ携ヘユキテ裏ヲ打タンコトヲ命ジタルニ午後既ニ成リ先ニ命ジタリシ壽字幅モ既ニ成リタレバ共ニ之ヲ送リ来レリ依リテ書ヲ添ヘテ薄暮之ヲ重野氏ニ贈レリ壽字幅ノ大サハ之ヲ展ベテ三疊ニ滿チタリ擬大雅ハ藤紙聯落ニ横書セシナリ

（明治三十一年三月二十六日付）

木菟麻呂は、ニコライ主教と共に、正教関係の祈祷書類の翻訳に取り組んでいた。その業務の隙間をぬって重野に贈呈する作品を作成することは、かなり困難なことであったに違いない。それでも木菟麻呂は「擬大雅麟奕七章」の詩とその書、及び「壽字幅」を完成させて、辛うじて寿宴の前日に重野に贈呈したのである。

木菟麻呂の『黄裳斎日記』には、寿宴当日の模様について、以下のように記されている。

雑事　本日ハ預定ノ如ク午後二時ヨリ芝山紅葉館ニ於テ重野博士ノ古稀壽讌ヲ開カル、ニ付同時刻ニ参館セリ同館玄關ニハ壽讌事務員等両側ニ整列シテ來賓ヲ迎ヘ其次ノ間ニハ同ジク係員机案ヲ陳ネテ壽讌ニ關スル事務ヲ取レリ此所ニ於テ刺ヲ通ジテ會費金貳円五拾錢ヲ出シ開會次第ノ摺物并ニ列席ノ室名符ヲ渡サル余ハ亀ノ間ナリキ次ギテ館後ナル能楽堂ニ導カル此所ニ於テハ席ニ就キテ後一時間餘ニシテ狂言二番アリ二人袴及千鳥ナリ終リテ後重野博士ハ壽讌惣代四名ニ導カレテ舞臺ニ進マレ惣代博士ニ對シテ本日開會ノ旨ヲ口述シ博士ハ諸氏ノ厚意ヲ感謝スル旨ヲ述ベ且簡短ニ其蒲柳ノ質ニシテ善ク此壽ヲ保チタルハ全ク平素攝生法ニ注意スルガ故ナレバ此ニ於テ諸氏ニ報ユルガ為聊カ長壽ヲ保タン諸方ヲ勸ムルトノコト又爾後八十才ニ至ルマデニ全世界漫遊ヲ遂ケンコトヲ目的トスルガ故ニ合セテ諸氏ノ助力アランコトヲ請フ旨ヲ述ベラレ其レヨリ能楽堂ヲ出デ、本館ニ就ゲ(ママ)ハ庭前ナル芝山ニ於テ日比野組ノ少年剣舞數番アリ頗ル雄壮ナリキ其前陸軍軍楽隊間斷ナク奏楽セリ之ヨリ館ノ一室ニ就キテ寄送品ノ陳列シタルヲ見ソレヨリ會場ナル亀ノ間ノ定席ニ就ケリ諸賓既ニ坐ニアリ酒饌既ニ備レリ席定マリシ時博士来リテ惣代壽盃ヲ献ゼシ由ナレドモ余ノ坐ニ就クコト遅カリシ為其時ニ後レタリ此席ニハ百餘名列席セリ楼上ナル鶴ノ間及松ノ間ニモ百餘名アルヲ見タリ其他ノ室ニハ往カザレバ知ルヲ得ザレドモ來賓四五百ヲ下ラザルベシ或ハ千名内外ナリトモ云フ席上ニハ各室共ニ諸氏ヨリ送ラレタル文詩ノ幅ヲ掲ゲタリ余ノ贈リシ壽字幅ハ鶴ノ間ノ壁間ニアルヲ見タリ八時頃ヨリ諸賓漸次ニ退散シ八時半頃余モ亦館ヲ去レリ此夜席上ニ於テ博士ハ箱入ノ錫製盃一個ヲ贈ラレタリ中ニ丙申元亘(ママ)〔旦〕ノ詩ヲ記セリ

（明治三十一年三月二十七日付）

『黄裳斎日記』の記述によれば、芝山紅葉館を会場に開催された重野の寿宴は実に盛大であり、その参加者数は「四五百ヲ下ラザルベシ或ハ千名内外ナリトモ云フ」ほどであった。紅葉館の能楽堂では狂言が、また庭では少年剣舞が演じられ、陸軍軍楽隊による演奏も絶え間なく行われた。

そうした中で木菟麻呂は、重野に近づくことすらできなかったようで、『黄裳斎日記』には重野との接触や会話はまったく記述されていない(注13)。先に述べたように、木菟麻呂はおそらく、重野に対して出版社の紹介について問いただし、もしも進捗がないのであれば、重野に具体的な行動を促すことを期していたと推測される。しかし、木菟麻呂は重野と直接話す機会

を得ることができず、盛大な寿宴に「會費金貳円五拾錢」を支払って参列した、数百名の中の一出席者に終わってしまうこととなった(注14)。

木菟麻呂の日記『黄裳斎日記』及び『秋霧記』の記述を見る限り、この寿宴以後、中井家所蔵の遺書の出版に関して、重野から木菟麻呂に何らかの情報等がもたらされたことは、確認することができない。重野による出版社の紹介はなかった可能性が高く、結局遺書出版の話はこの時実現しなかった。重野は木菟麻呂に対して、遺書を実見した上で出版を勧めたのであるから、中井家所蔵の遺書が有する価値を認めてはいたと考えられるのだが、出版社を「紹介スベキ事ヲ約」したのは、重野にすれば所謂社交辞令の類だったのかもしれない(注15)。

おわりに

以上述べたように、明治三十年(一八九七)四月、懐徳堂関係遺書の出版をめぐって重野安繹は、中井木菟麻呂に対して出版社の紹介を約束したものの、結局その約束を果たさなかった。前述の通り、木菟麻呂は明治二十五年(一八九二)に中井履軒の『百首贅贅』を出版するなど、家蔵の懐徳堂関係遺書の出版に心を砕いていたが、資産の無い木菟麻呂に出版することができたのは、一部の資料に限られていた。懐徳堂関係遺書の出版が進展したのは、周知の通り、明治四十四年(一九一一)十月に懐徳堂記念会が懐徳堂記念祭の挙行とあわせて行った記念出版による(注16)。

それでは、明治三十年(一八九七)の春に重野と木菟麻呂とが接触したことは、後の懐徳堂顕彰運動とまったく無関係であったかといえば、そうではなかろう。先述の通り、明治四十一年(一九〇八)六月に木菟麻呂が重野を訪問したことをきっかけとして西村時彦と木菟麻呂との面談が実現し、そしてそれが懐徳堂顕彰運動の勃興へと進展することとなった。この明治四十一年(一九〇八)の木菟麻呂と重野との面談は、明治三十年(一八九七)に既に二人が接触していたからこそ実現したと理解すべきである。この時木菟麻呂は、出版社を紹介するとの約束を反故にされたわけだが、懐徳堂の再興を夢見る木菟麻呂が頼ることのできる有力者はそもそも限られており、中井家所蔵資料を実見するために中井家を訪れて直接会った重野は、木菟麻呂にとって貴重な存在であったに違いない。だからこそ明治四十一年(一九〇八)に木菟麻呂は、重野を訪問したものと考えられる。

また、明治三十年(一八九七)に重野が中井家所蔵遺書を実見した際、複数の同行者を伴っていたことは、その後懐徳堂関係遺書の存在に関する情報が複数の経路を経て東京の学術界の関係者に広まるきっかけとなった可能性が考えられる(注17)。重野と木菟麻呂との最初の接触は、直ちに懐徳堂顕彰運動を始動させるには至らなかったが、明治三十年代において懐徳堂を評価した動きの一つであり、後に懐徳堂顕彰運動が勃興する伏線となった出来事と理解すべきであろう。

注

(1) 中井木菟麻呂「己巳残愁録」(『懐徳』第十号、一九三二年)によれば、中井家は懐徳堂閉鎖の際、その土地建物を「油掛町の天満屋善九郎に金參百両にて讓り渡」した。その後懐徳堂の建物は、「多年間、元形のまゝにて空屋となつてゐたが、それから逸見氏の手に渡り、門牆を壞ちて長屋を建て、講堂其他は元形の儘區劃を施して、借屋となつてゐた。其後の消息は聞かなかつたが、何年頃にか全部を取り毀ちて、今の煉瓦造の高屋を見るやうになつた」という。

(2) 木菟麻呂は明治二十六年(一八九三)に『重建懐徳堂意見』と『重建水哉館意見』とを印刷して関係者に配布したが、再建は実現しなかった。北崎豊二「中井木菟麻呂の水哉館再興計画―昭和初年の場合―」(『懐徳』第六十八号、二〇〇〇年)参照。

(3) 懐徳堂顕彰運動の展開した経緯に関して、「懐徳堂復興小史(懐徳堂記念会記事鈔録)」(再刊本『懐徳堂考』〔財団法人懐徳堂記念会、大正十四年(一九二五)十一月発行〕所収)には、「懐徳堂學徒離散、弦誦の聲を絶つこと四十年にして、天運循環し來り、復興の氣運は茲に復た開けぬ。而して實に其の端を大阪人文會に發せり。」と述べられているだけで、懐徳堂の閉鎖から大阪人文会の活動までについては触れられていない。また木村英一「今日の懐徳堂記念会」(『懐徳堂の過去と現在』〔財団法人懐徳堂記念会、一九七九年〕所収)は、懐徳堂の閉鎖から記念会成立を中絶時代と位置付けるが、記念会成立に向けた大阪人文会などの懐徳堂の顕彰の動きが起こったことについて「期せずして懐徳堂に対する追憶が発生した」と述べるのみで、その発生前の中絶時代については触れていない。脇田修・岸田知子『懐徳堂とその人びと』(大阪大学出版会、一九九七年)第五章「近代での復興」も同様である。拙著『市民大学の誕生―大坂学問所懐徳堂の再興―』(大阪大学出版会、二〇一〇年)参照。

(4) 拙稿「『懐徳堂纂録』とその成立過程」(『中国研究集刊』第五十八号、二〇一四年)、及び「『懐徳堂記録拾遺』と「懐徳堂記録」」(『「観光・言語・文学」国際学術研討会論文集』〔台湾・国立高雄餐旅大学応用日語系〕、二〇一四年)、「西村天囚の五井蘭洲研究と『懐徳堂記録』」(『懐徳堂研究』第七号、二〇一六年)、「西村天囚の五井蘭

洲研究と関係資料―『蘭洲遺稿』・『鶏肋篇』・『浪華名家碑文集』について―」（『懐徳』第八十五号、二〇一七年）参照。

（5）『黄裳斎日記』全十一冊は、明治二十八年（一八九五）一月から明治三十三年（一九〇〇）一月までの木菟麻呂の日記である。木菟麻呂の異母妹・終子の養子であった新田和子氏が昭和五十四年（一九七九）に大阪大学附属図書館に寄贈した、懐徳堂文庫の第一次新田文庫資料の一つである。池田光子「第一次新田文庫暫定目録」（『懐徳堂センター報』二〇〇四、大阪大学大学院文学研究科・文学部懐徳堂センター、二〇〇四年）参照。なお、前述の「追懐遺事三篇」において、木菟麻呂は明治三十年の重野との接触に触れていない。

（6）重野の持参した「幽人先生ノ猿島復讐圖幅」と類似しているという中井家所蔵のものは、現在「解子伐袁図」として懐徳堂文庫に収蔵されている。なお、重野は明治二年（一八六九）から明治四年（一八七一）まで、大阪本町に家塾・成達書院を開いている。西村時彦「成斎先生行状資料」（『重野博士史学論文集上巻』〔雄山閣、一九三八年〕所収）参照。

（7）『紫煙帖』・『緩歩帖』・『襄陽帖』は、いずれも石庵の遺墨を集めたものである。中井家の所蔵する『紫煙帖』は、明和元年（一七六四）に石庵の子・春楼が刊行したもので、大正五年（一九一六）十月に木菟麻呂は百部復刻している。

（8）三月二十六日・二十七日付の『黄裳斎日記』によれば、木菟麻呂は重野らによる訪問の前日に「露館ニ如キテ觀覧ニ供スベキ遺書類并ニ竹山先生印匣等ヲ出シ事務所ニ置キテ帰」り、当日の午前中に「車ヲ雇ヒテ露館ニ如キ昨夕事務所ニ預ケ置タル圖書類ヲ携ヘ帰」っている。重野らが実見を希望した資料を、保管していた場所から自宅へ移動させて準備したのである。

（9）「懐徳堂遺編目録」の作者について、『懐徳堂考』上巻には「中井成文」（成文は木菟麻呂の号の一つ）であるとの言及はあるが、「中井成文」が誰かは説明されていない。これに対して下巻には、「竹山の著述は、其の孫黄裳の編次せし懐徳堂遺編目録に見えたるが（後略）」と、木菟麻呂を竹山の孫とする誤りはあるものの、説明が加えられている。このことは、『懐徳堂考』の上巻と下巻とには、西村がそれぞれを執筆にあたって用いた資料に大きな違いがあることが関係している。すなわち、「はじめに」で述べた通り、木菟麻呂と西村とは明治四十一年（一九〇八）八月に既に直接会っているのだが、明治四十三年（一九一〇）二月に大阪朝日新聞に連載した「懐徳堂研究其一」、つまり『懐徳堂考』上巻の連載執筆に当たって西村は、木菟麻呂に資料の提供を一切求めていない。また東京の木菟麻呂は、そもそもその連載の開始を当初知らなかった。西村は『懐徳堂考』上巻の連載終了直後の同年二月二十八日、上京して木菟麻呂と二度目の面談を行い、その際に『懐徳堂考』下巻の執筆に用いる資料の提供を依頼した。依頼を受けた木菟麻呂は『懐徳堂水哉館先哲故事』を執筆、この『懐徳堂水哉館先哲故事』を活用して西村は『懐徳堂考』下巻を執筆した。注3前掲の拙著『市民大学の誕生―大坂学問所懐徳堂の再興―』参照。

（10）幸田成友は、明治三十五年（一九〇二）十月十六日に木菟麻呂を訪問し、懐徳堂関係資料の実見を行っているが、同日付の木菟麻呂の日記『秋霧記』には、幸田が「阪地ニ在リテ岡本和氏ヨリ仄ニ余ノ事ヲ聞カレ亦其兄ナル露伴氏ヨリ余ノ此地ニ在ルコトヲ聞」いたため、木菟麻呂を訪問したと記されている。木菟麻呂と木菟麻呂の所蔵する懐徳堂関係遺書の情報は、東京に住む幸田露伴にも知られていたことが分かる。露伴はキリスト教関係者から情報を得た可能性が考えられるが、他にも情報が伝わったルートが存在したものと推測される。なお、明治四十四年（一九一一）九月に幸田成友が自費で五百部出版した『懐徳堂旧記』の序文には、「予少時通語の素読を家兄に承け、また稍長じて昔々春秋及逸史を読み、大阪に懐徳書院あり、竹山履軒両先生あるを知れり。」とある。

（11）明治三十一年（一八九八）二月十八日付『黄裳斎日記』には、「時事」として、「山階宮晃親王殿下ハ去一月中旬ノ頃ヨリ御風邪ノ気味ニ渡ラセラレ半井安藤兩國手ノ診ヲ受ケサセラレ御療養中漸次御衰弱ニ趣カセラレシ所御養生相叶ハセラレズ遂ニ昨十七日午前四時四十分ヲ以テ薨去遊バサレタリ御年ハ八十三御病状ハ黄疸ナリト承ル之ニ付三日間歌舞音曲ヲ停止スル命アリ宮中ニテハ五日間喪ヲ服セラル、ト云フ（中略）余ハ此ニ於テ殿下ガ懐徳書院ニ寵臨セサセ給ヒシコト余ガ往年殿下ニ謁シテ優渥ナル言ヲ賜ハリシコト等追懐シテ轉哀悼ノ情ニ堪ヘズ此ニ之ヲ記シテ聊敬悼ノ誠ヲ效ス」と記されている。

（12）注1前掲の中井木菟麻呂「己巳残愁録」参照。

（13）木菟麻呂の座席は「亀ノ間」に指定されていたが、木菟麻呂は自分の席に着く前に、別室に陳列されていた重野への寄贈品を見ていたため、重野と寿宴の代表者らが「亀ノ間」に来て行われた献杯に間に合わなかった。

（14）この重野の寿宴には西村時彦も出席していたと考えられ、『碩園先生遺集　碩園先生文集　巻二』（財団法人懐徳堂記念会、昭和十一年〔一九三六〕十月）には、明治三十一年（一八九八）

に西村が受業生の一人として執筆した「成斎重野先生七十寿序」が収められている。西村は明治二十九年（一八九六）秋、大阪朝日新聞から東京朝日新聞の主筆に転じたが、明治三十年（一八九七）十一月から明治三十一年（一八九八）二月まで清国を訪問して張之洞らと面談した。西村は帰国後も東京朝日新聞に勤務したが、後醍院良正『西村天囚伝　上巻』（朝日新聞社社史編集室、一九六七）によれば、西村の渡清後、池辺三山が東京朝日新聞の主筆となっていたころから、西村には「もはや社説に筆を執る機会もなく、いわば職を奪われた格好になった」。

（15）後に木菟麻呂は「己巳残愁録」において、明治二十六年（一八九三）に「重建懐徳堂意見」を執筆して懐徳堂再興を企てたことについて「然るべき後援者もなく、方法も極めて拙劣であつた」と述べている。木菟麻呂がその四年後の重野との最初の接触に期待を寄せたのは、そうした反省を踏まえてのことであろう。

（16）明治四十四年（一九一一）十月に懐徳堂記念会が記念出版した『論語逢原』については、木菟麻呂が翌明治四十五年（一九一二）一月に、同じ紙型を用いて東京の東陽堂から出版している。拙稿「二つの『論語逢原』―懐徳堂記念会と中井木菟麻呂―」（『懐徳』第七十九号、二〇一一年）参照。

（17）重野に続いて、明治三十五年（一九〇二）には『大阪市史』の編纂にあたっていた幸田成友が木菟麻呂を訪問し、中井家の所蔵する懐徳堂関係資料を実見しているが、今のところ、重野の実見と幸田の実見との間に直接関係があったことを示す資料は確認できない。しかし、二人の実見には関係があった可能性が高いと推測される。注10参照。

（島根大学学術研究院教育学系教授）